舞鶴地方史

第3号

発行者
舞鶴地方史研究会
（舞鶴市立西図書館内）

印刷所
小川印刷
舞鶴市竹原 TEL西1529

舞鶴市河辺中の干田古墳の調査

■東舞鶴高等学校郷土研究倶楽部

一、序

この古墳の調査の機縁となったものは、かって東舞鶴高等学校郷土史クラブの調査によって、その存在が確認されたものであるが、その時の調査によれば、四基程の石室古墳と、一部石材によって、方型の段築部が図指されていた。かって、その一部から、終戦後出土品が発見されていたことがあり、河辺元村長さんの桜井井之元氏宅に保管されている事等も調査されていた。

しかし、かかる貴重な調査も、知るのみにして、時の経るままに記憶もうすれ、埋没することを恐れ、今度の調査は更にそれを、調査書として、記録するための再調査検討である。

昭和三十八年六月十六日、クラブ員約一〇名、山内、岩田、両顧問により、現地及び桜井氏宅に赴き、第一回の調査をなし、七月二十九日より三十一日まで、沖　恭隆君、梅垣邦男君等によって、現地測量、及び遺物調査の結果である。

この地の元村長、桜井氏の言によれば、河辺中の村落内にある八幡社は、三宅社（みやけのやしろ）と称され、古記に、「加佐郡のカンベにいます三宅の社」とあり、カンベは、なまって現、河辺（ヘカワベ）となったのだという。

なおこの地に大正二年八月の頃、西田直次郎先生が調査の為お出になり、桜井氏宛の親書が残されていた。西田先生は、主として河辺八幡の石どうろうを調査されたのだそうであるが、現地も御覧になって、興味深い遺跡であると感想を残しておられたそうである。

その後、昭和二十五年頃、その一つから出土品が発見されることがあって、金環、玉類、土器等、桜井氏に保管されている。

二、所在地の概況について

舞鶴市河辺は大浦半島の付根の平口（引揚援護局跡）より東北方約八〇〇米の位置に位する。

■目　次■

舞鶴市河辺中の干田古墳の調査
東舞鶴高等学校郷土研究クラブ
田辺藩と海援隊 ―― 史料紹介 ――
瀬戸美秋
「朝代神社」の新資料について
井上金次郎
例会だより
雑　報
編集後記

大浦半島の背骨をなす山脈を北に背い、南を青葉山より分岐して東西に並列して走る山脈に限られる六〇〇米程の細長い地溝に発達した水田地帯に面し、道路は、この谷の入口「中田部落」より田井道が延びている。河辺中は、村落内に、カンベ八幡と古称された式内社がある。

古墳の所在地は「河辺中」の集落から反対側の山脈のくぼ地にあって、付近に人家はない。周囲を畑地、雑木林に囲まれている。側に石垣を巡らした畑地があるが、その石材は、石室古墳の破壊によるものと考えられる。

この古墳は所謂、群集墳をなし、現存するものは、すべて破壊し尽くされたもので約六基認められ、そのすべてが、横穴の石室を有するもので、山のくぼみにあって、竹林が被っている。斜面ではあるが、目立たない山蔭に位置する。

三、古墳の概況

前述の如く、その占める位置は前期型の墳丘が、独立丘上、又は天野を俯瞰する丘陵上にあったり、中期型が、平野の中央部に占位したりする例とは、一見してその趣を異にしている。更に墳丘を有するものも、夫々が、二〇米乃至三〇米を距てて、相隣り、墳丘の規模も十一米乃至十二米である。

かような特徴は、綾部、福知山地域に普通に見られる後期、乃至は晩期の群集墳的特徴と考えられる。

第二図は、その分布である。

一号墳 — 三号墳は、石室の上部に径十一米乃至十二米、高さ二・五米〜一・五米の明瞭な円墳を有する。

四号墳 — 五号墳は、山の斜面に存在し、斜面に平行する石室を有し、墳丘は目立たない。

×印は、とり去られた石くずを積みあげた個所であるが、付近に石室らしい跡がくぼみとなって残されている。

次にその石室の墳丘の概況を詳述する。

一号墳は石室を有する古墳であって、その上方に円形の封土を持つ。径東西に十二・五米、南北に十一米、高さ西側二・七〇米、東側一・八二米、図示の如く、墳丘と石室は荒廃していて、墳丘の中央部より破壊され、蓋石が半ば撤去されて、封土が石室の大半を埋め、石室の後半が大口を開いている。現存する部分は、墳丘の東半面で側石蓋石共に残っているが、床面は、封土の土砂に埋没している。奥行二・五五米、巾は奥壁に於て一・五五米、隙間なく、見事に組合わされた壁面は、これが奥壁であることを示す。

破壊された中央部での巾は一、四〇米、それより西半面は、墳丘の土砂に埋まって、側石の延長がはっきりしない。しかし、その出口と考えられる部分に大石が封土の間に散らばって発見される。

石室の用材は、この地が火山地帯で付近から豊富に発見される自然石であるが、巨石の組み合わせ技術が見事で、隙間に小石をつめ合わせるような粗雑さが見られない。石の大きさは、七・八十糎角もあり、巨大な石である。

次に墳丘の円と、石室の位置の関係であるが、石室は円のほぼ中央部に位する。こういう傾向は、綾部地方の山間部では、自然石を用いた竪穴石室の例が多いので、両端の構造がつきとめられるまで、横穴石室であるとは、断言しかねる。又、両そでとか片そでとかの石室形式についても、不明である。

埋まった封土を発掘しないので、断言し兼ねるが、断面図と、石の埋まっている状態の観察から、石室の大きさは、長さ約六米、巾約一・五米と推定した。

二号墳も円墳にして石室を有す。

径一二・五米、高さ二・二〇米、これも中央部より蓋石、側石を失い奥壁も天井石一個を残すのみにて、石室構造を破損している。中央部より東側が三米程側石を残し、一号墳同様の巨石でしっかりと積まれているが、西側の大半を破壊して封土で埋まっている。側石の残っている三米余の石室の残部の深さは二米二〇糎程あり、巾も一・六五米ある。

石室の大きさは、長さ五・五〇米、巾一・六五米と推定している。

この石室の構造については、測定図から二様に解釈される。

その一は、東西の径は、封土の破壊によりひきならされたものと考えるべく、さすれば、実測の径は、測定値よりも小なることが考えられ、両側を開した竪穴式となるものであるかも知れない。

更に別の推定は、墳丘の高さが相当あることから、この石室については、玄室・羨道等の構造の入り組んだ相当広大な規模のものであること、この石室の原型は、元村長、桜井氏の言に、出土品が別郷から出たというような言葉を想い出し、後者の見解をとっているが、側石の石積みの破損した今は、想像以上を出ない。

三号墳は、同様円墳で、石室を持つ、径一二米、高さ一・五五米の封土を有する。石室は、天井石を抜去され、三つの内で最も荒廃している。わずかに奥壁の巨大な上下二枚の大石と、北西の側石二つを残すが、他は取り去られて封土で埋まっている。石室の推定は、封土のくぼみで測定した。長さ四・九〇米、巾一・一〇米。

四号墳の現況は、頂部に封土を失い露頭した巨大な二つの天井と、それを支える側石が、その部分だけ残されている。他の側石は抜去され、土砂に埋まった石室跡が、くぼみとなって残っている。天井石の大きは、二個共、巾七八糎、長さ一米四、五〇糎もある。荒廃しているが、本墳は、斜面に対して平行の主軸をもつ、くぼみの大きさより、石室の推定、長さ五、七〇米、巾一、一〇米、天井石の位置は、地山とほぼ同水準にあって、石室の石積みは地面下に隠れている。露頂した天井石の土に封土があっても、せいぜい五六〇糎くらいのものと推定する。

以上が観察であるが、この石室の特徴は荒廃しているにかかわらず注目すべきものを持つと考える。

前述の一号墳から三号墳までの石室は、構造的に地山若しくは地山をすこし掘り下げたところから側石を積み始め、石室はほとんど地山の上に位置するのに対し、これは天井石の頂部をのぞいて石室全体が地面下にあることである。

前者が、石室の上部に高塚式に、径十二米位、高さ二米程度の封土を有しなければならぬ理由は、その積み石を被うためのものである。本墳の原型は、天井石の頂部をのぞいて石室全体が地面下にあることである。従って封土が低い。同種のアイデアを持つものは、綾部地方の平野部を離れて谷間に入ったくぼ地にひっそりと発見される。ただし、綾部地方のものが、崖面に直角な石室を有し、その入口が崖地に開いているのに対し、本墳は、傾斜に平行した主軸をもつことで、斜面は出入口には役に立っていない。

五号墳は構造的に、四号墳と同種のものであるが、側石、天井石はすべて失い、長さ四米、巾一、五米のくぼみがあるのみである。

×印のものは、以前に調査した東舞鶴高郷土史クラブでは、方部の段築ではないかと考えていたが、今度の調査では、古墳破壊後の石くずを竹林の土取り等の作業によ

って出来た崖に石垣状に積み上げたもので古墳築造によるものではないと考える。

出土品について

この出土品は、昭和二十五年頃、第二号墳の石室の底をさらえたとき発見したのだという。今は、代表保管責任者として、元村長であった桜井井之元氏宅に保管されている。

徹底的な調査発掘でないので、発見し残されたものが多いだろう。

主要品目左の通り。

○ 玉　類

切子玉　二個　勾玉　三個

○ 金　環　二個　中　一個

○ 刀子　破断　一個

○ 鉄のみ　破断　一個

○ 鉄　鏃　破断　一個

○ 土　器　類

須恵杯（蓋部）（身部）破断多数

須恵椀　一個　須恵横瓶　一個

土師椀　一個

土器はいずれも破断部にして、満足な完型品は少ない。

次に出土品についての観察を詳述する。

○ 玉　類（出土品実測図　第一図参照）

(一) 切子玉（水晶製）

数は大小二個あって、大は長さ三・二糎、巾二糎ある。小は長さ二・九糎、巾一・六糎、どちらも中央に紐を通す穴が一方よりあけられている。見事な結晶六角柱に細工を施したもので無色である。

(二) 勾　玉

一はめのう製、二個は碧玉である。

めのう製はずんぐりとしているが、碧玉製の二個はやゝ細味である。特徴は、その内弯曲線が、コ字型をなしていることである。

○ 金　環

中環一個、大環二個、総計三個ある。作りは、地金の銅環の上に金の薄板を巻いたものである。観察するに表面の金色は燦然とせず、黒ずんで燻銀色である。金に不純分が多いことを示すのではなかろうか。

○ 鉄　鑿

破断品であるが、両肩のはった刃部を欠損した上部の木の柄を着装する身部で十一糎程ある。上端の太い部分は、木の柄を着けるための穴があり、木質が付着している有銎式の鑿である。本品の当地域での出土例は、綾部市栗町以久田野四七号付近、並びに綾部市豊里町三宅荒神塚古墳（昭三七・一一発行綾部史談会参照）がある。

○ 鉄　鏃

破断部ばかりで、それも長さ六糎程の細長い茎部ばかりである。その内三個程はきっ先部があるが、箆被ぎ部が欠損している。断面は矩型中空の鍛造品できっ先とつなぐとき、その原型は茎の長い尖根式で、天田郡牧古墳の鉄鏃 (2) の形式に当たるべく観察される。「天田郡牧古墳、梅原末治　京都府史蹟名勝天然記念物調査報告、巻二〇P、七五所載」

更に保存されている茎部は、二個乃至三個がくっつき合っているのであるが、これは、副葬時束になっていたと解すべきである。

○ 土　器

保管されているものは破片が多く、三十個程もあるが、三、四個残った完型品は、薄手で焼きひずみが強い土器群のうち、注目すべきものは第三図、蓋付の須恵杯

の身部で、この器型特有の口縁部の「かえり」は小さく、ほとんどあるかなきかの高さでしかないこと、更にその器型は土器としての実用性を疑う程矮小化している点である。（杯は口縁部に於て至十一糎、高三・八糎）　矮小化の傾向は第七図須恵椀、第八図須恵横瓶等に共通して見られる特色で本古墳出土の土器の性格として、注目すべきである。

須恵器編年の上からは、平凡社刊、世界考古学大系　日本Ⅲの後の表、（横山浩一氏試案）を参考にすれば、桃谷古墳型（京都峰山町新治）、野畑古墳型のものに相当すると観察する。（白鳳式の瓦と桃谷型土器 ―― 岐阜県丸山窯趾、七世紀後半）

本論から外れるが、調査者はかって綾部地域の栗町以久田野古墳群、奥小西町の古墳、石原町等に於てこの傾向が、いずれも桃谷型、野畑型に於て見られることを観察していたが、調査範囲の狭さから地域的な特色という風にも考えていた。しかし今、舞鶴市の奥地、大浦地方においてかかる品を発見したということは、須恵器という量産土器の特質上、劃一性をもった一つの時代的な傾向としてとらえてもさしつかえないのではないかと考える。又、それは、副葬時、従来の日用品と別けて、葬儀用として特別に死者の供応用として使用されたものと推測すべき資料として注目すべきである。

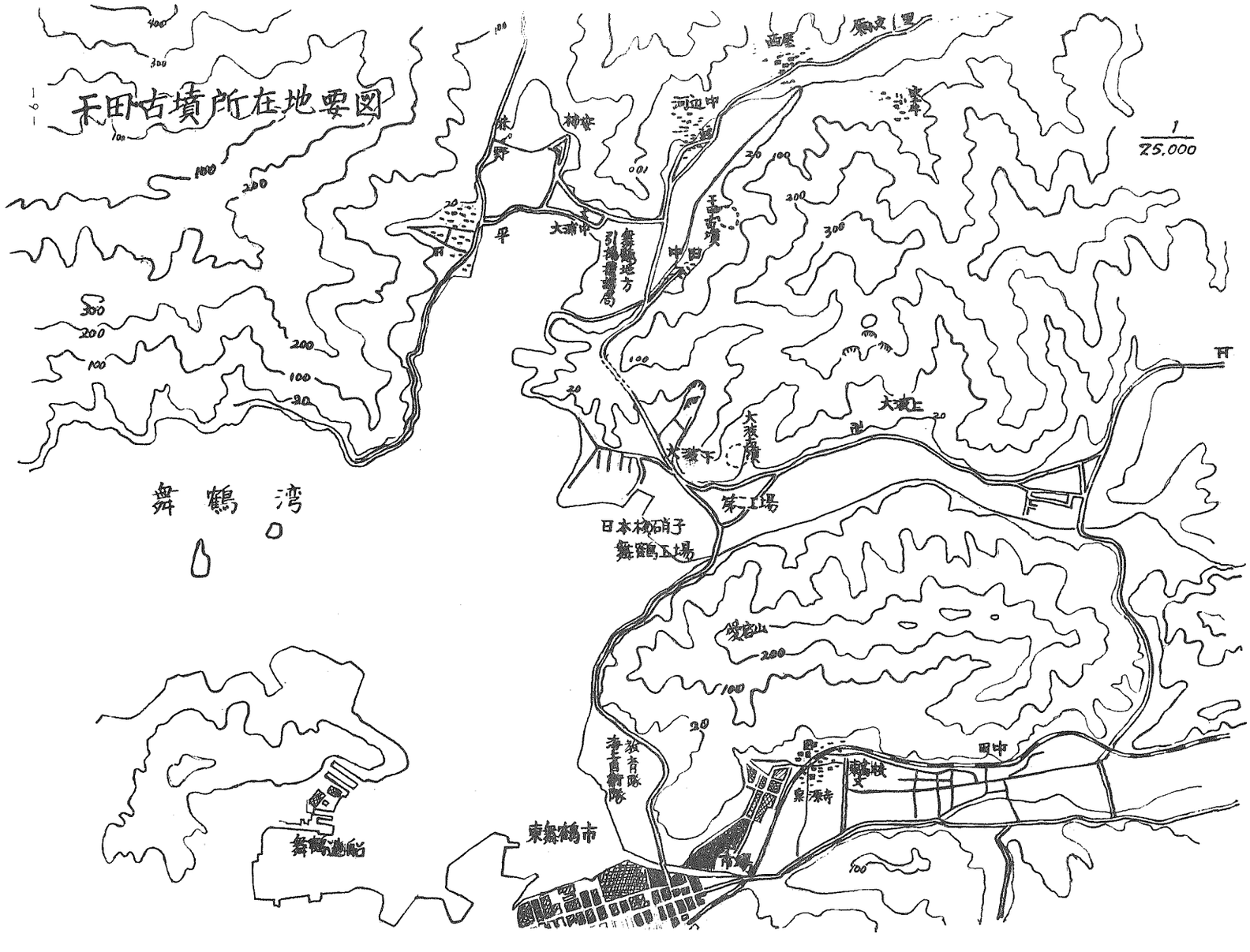
然し観察すれば、本古墳出土の土器は、第六図（須恵杯の蓋部であるが）に示す如く普通の大きさのものも混っている。故に損失のはなはだしく全貌がつかみ得ないものの、土器形式に於て、すくなくとも二つ以上の特色をもつものがあったと推定される。これを同一石室内に発見したということであるので、製作年代のそれぞれ異ったものを同一個所より発見したことについては、推定として、これまでの周辺地域の先例にのっとり、石室の使用が一回きりでなく相当年代にわたって使用されたものとしておく。

結　語

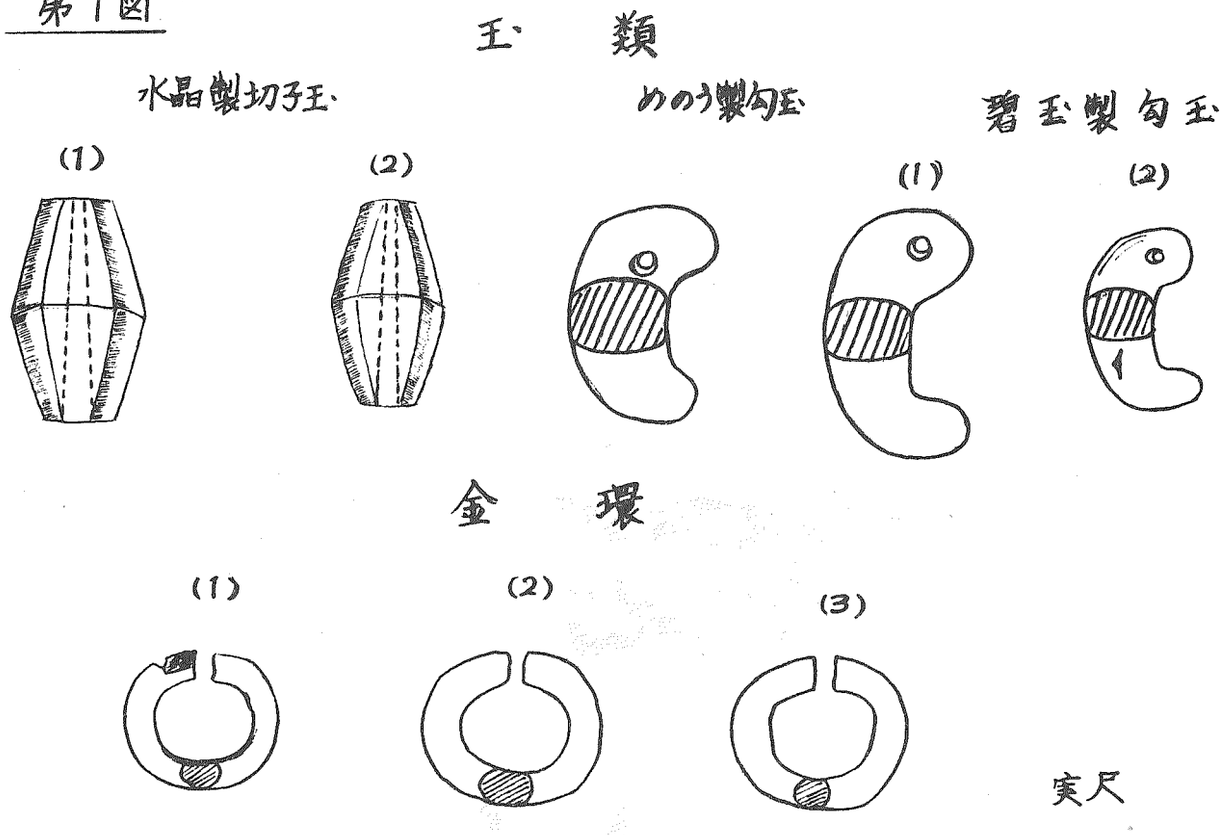
以上の調査より、本古墳の特色は、(一)群集墳的立地にあること、(二)そのあるものは巨石積み石室の築造に当り地上部の築造にはできるだけ手間を省こうとする傾向の見られること、(三)出土品には、玉類にめのう製、水晶製が多く、金環類も多い。須恵器の特色に種々後期的特徴の見受けられること、にある。こうした傾向から、古墳の後期的色彩、特に晩期的傾向の強いことが考えられる。

又、この六基の群集墳は、構造上明らかに二つの様式が認められ、それは、旧い様式のものと新しい様式のものであると考えられるが、このことは、この築造が一時代に造成されたものではなく、つぎつぎと相当期間に渡って形成されたであろうことを推測させる資料と考える。

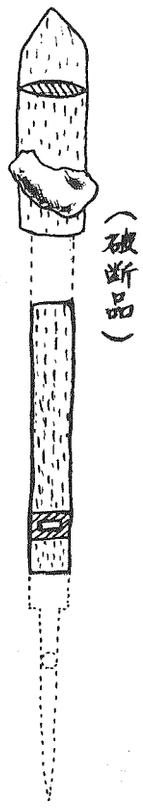
最後に、本古墳の持つ郷土的意義は、古代河辺の渓谷が、三宅とか神戸とかが置かれるようになって、ようやく大和との結びつきをもつことにより脚光をあび、水田が開かれ、次第に集落が形成されていった開拓の歴史のひとこまと見るべく、後代の住居者としての吾々には意義の深いものがある。当古墳こそは、この山間部を開いていった遠い祖先の奥津城として、かかる歴史の跡として、保存されることを切に望むものです。

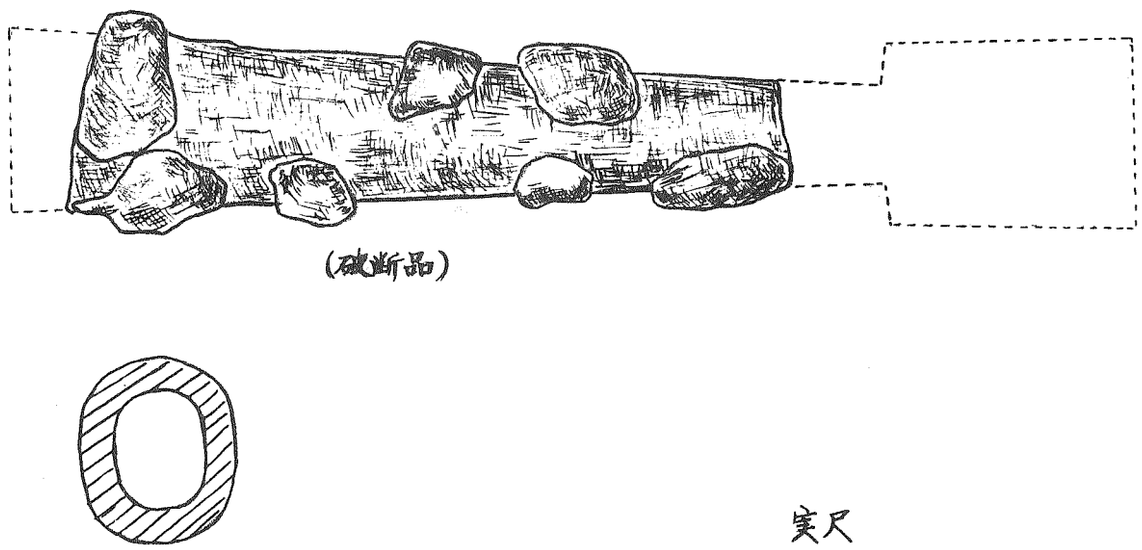

天田古墳所在地要図
1/25,000
舞鶴湾
日本硝子舞鶴工場
第二工場
東舞鶴市
舞鶴漁船
大浦上
大浦下
大浦中
柳安
西屋
中辺
天田古墳
愛宕山
教育隊
海上自衛隊
東本願寺
市場

第1図

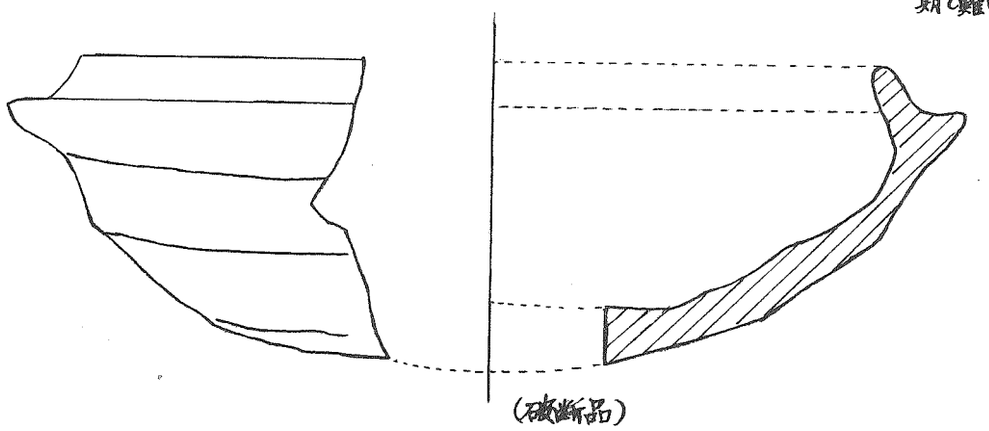

玉類
水晶製切子玉
(1)
(2)
めのう製勾玉
碧玉製勾玉
(1)
(2)
金環
(1)
(2)
(3)
実尺

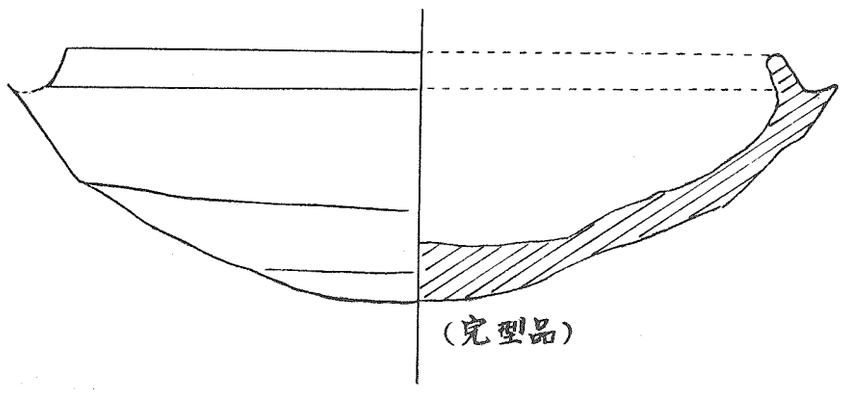
第2図





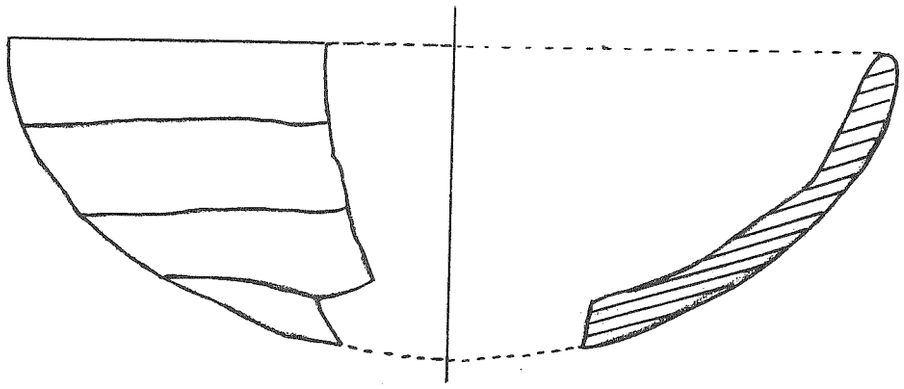
第3図





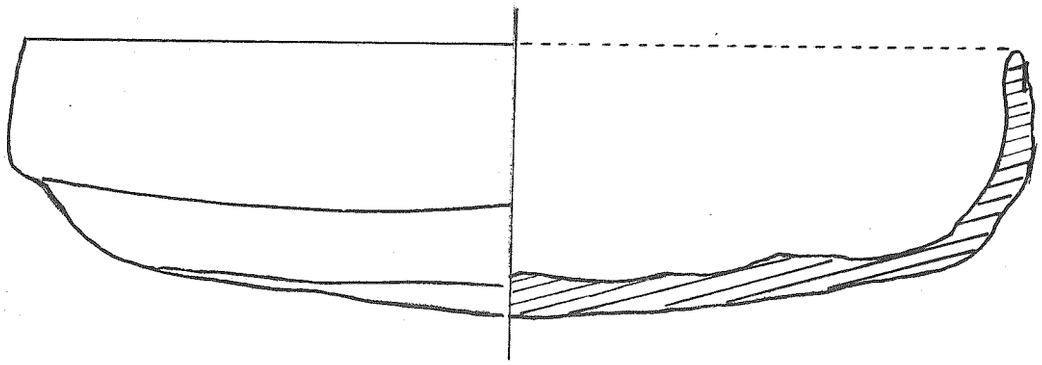
第4図

土師 椀



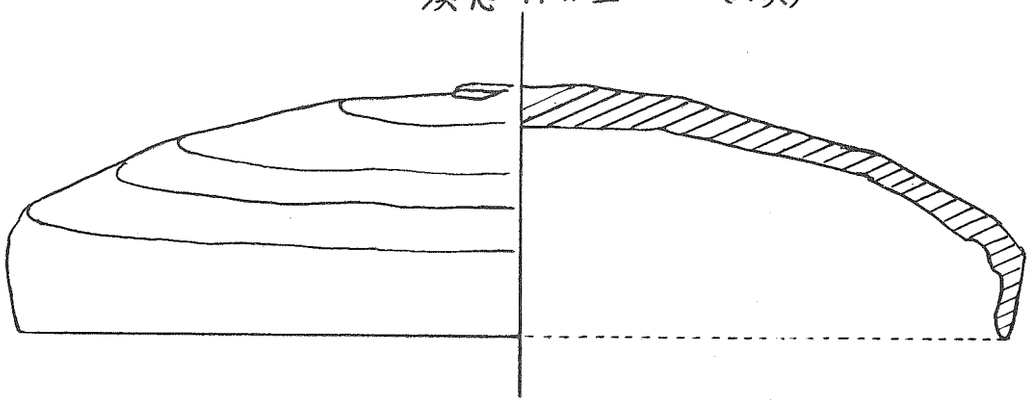
第5図

須恵杯の蓋



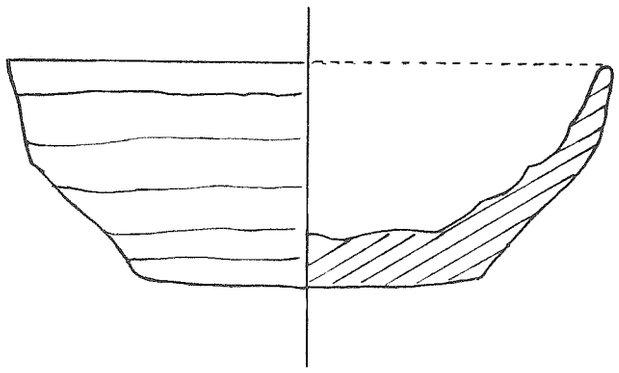
第6図

須恵杯の蓋　(欠損)



第7図

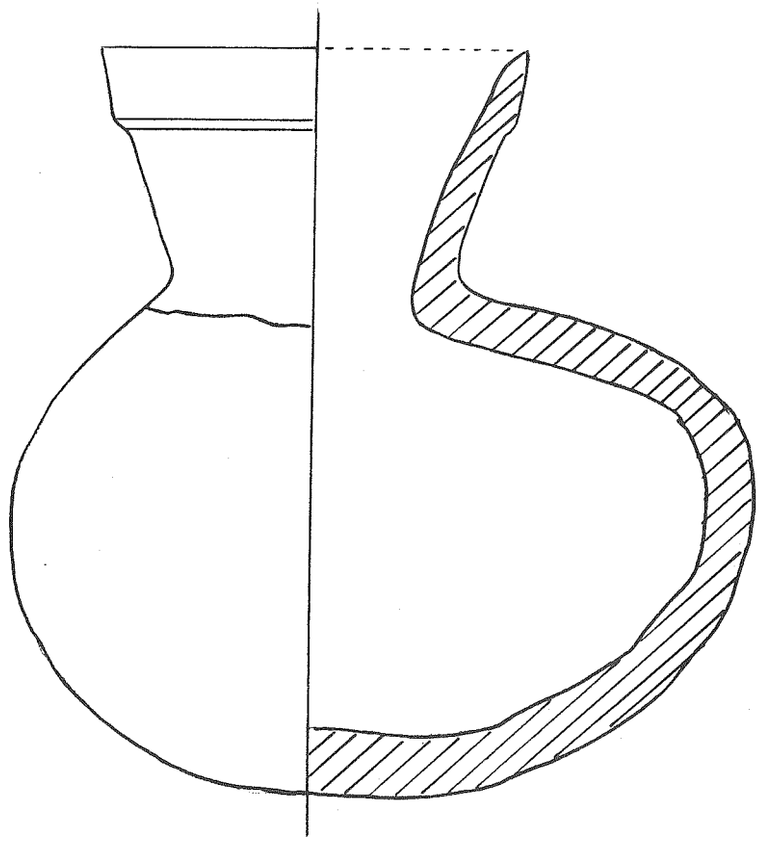
須恵 椀



実尺

第8図

須恵横瓶



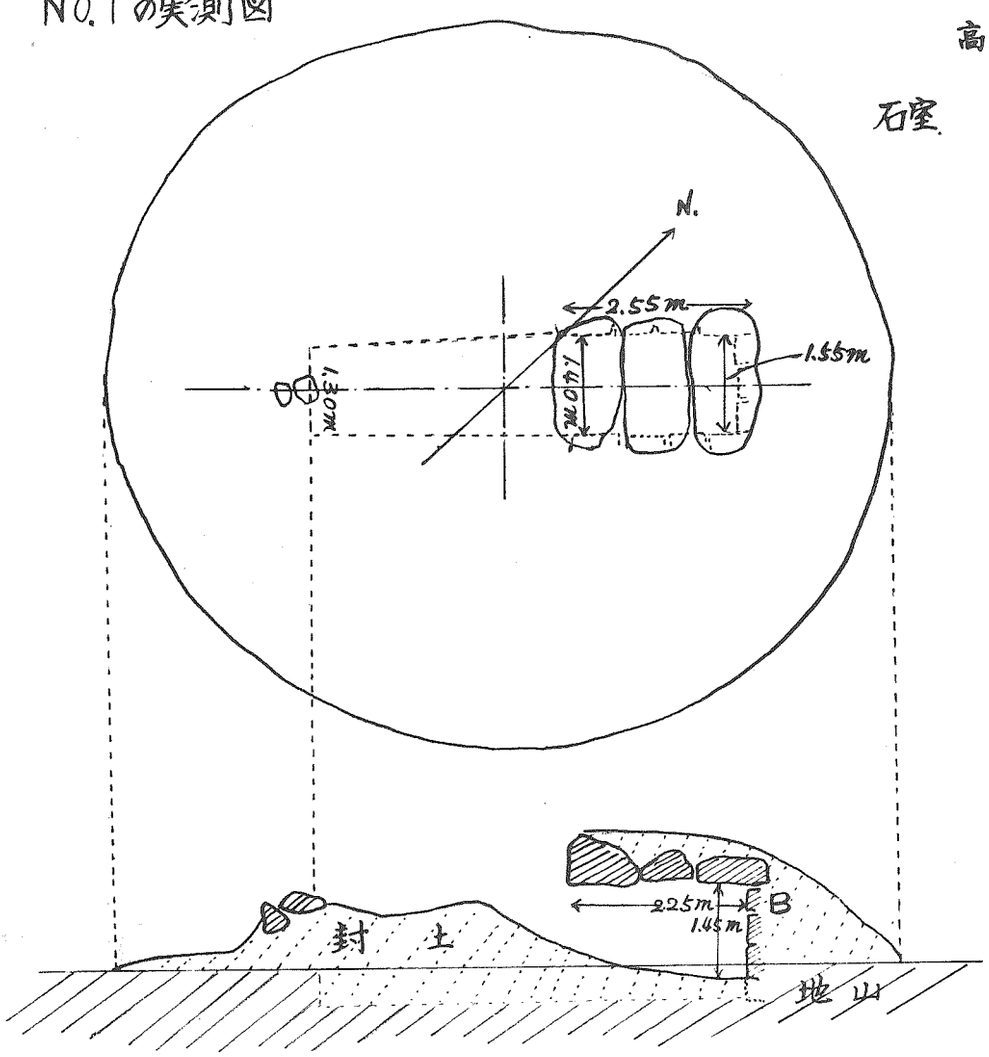
実尺

NO.1の実測図

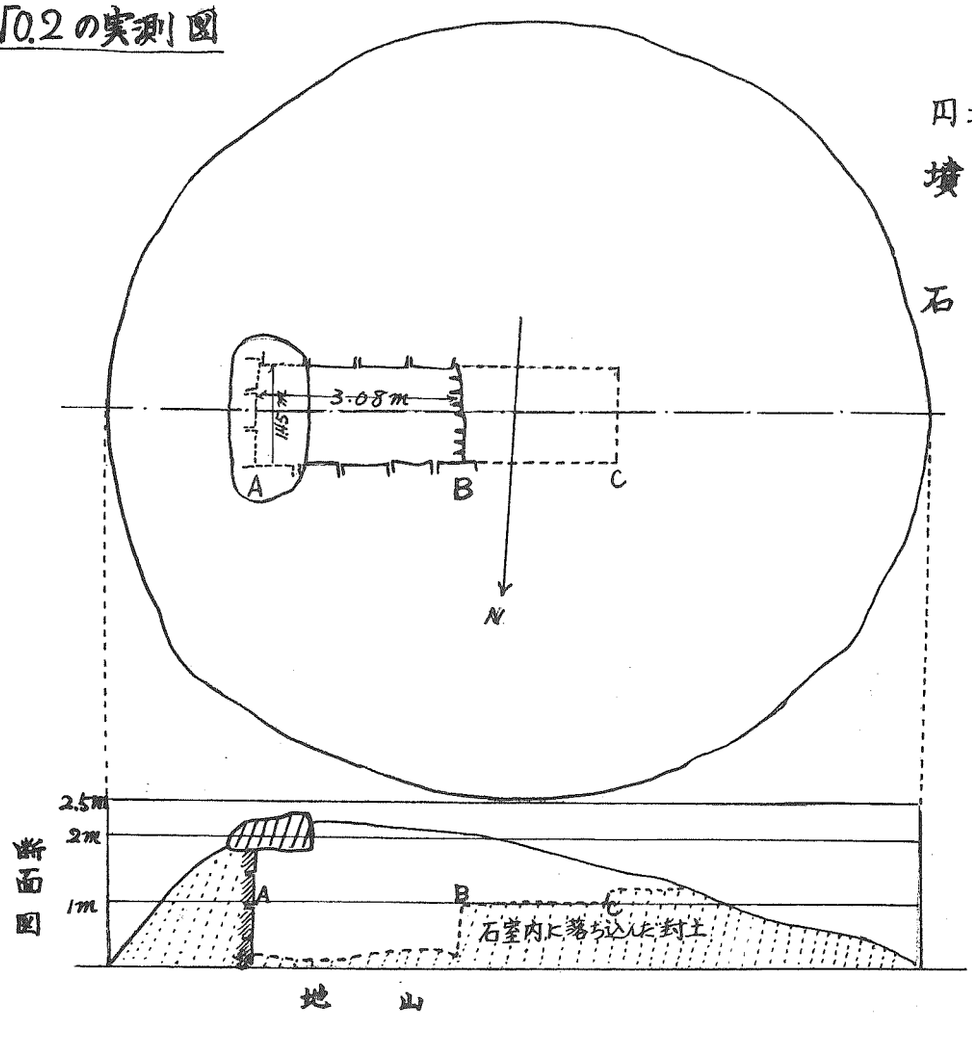
円墳石室を有す。墳丘、径 東西 12.50m
南北 11.00m
高 西 2.70m
東 1.82m

石室 長 6.40m
巾 1.55m

1/100



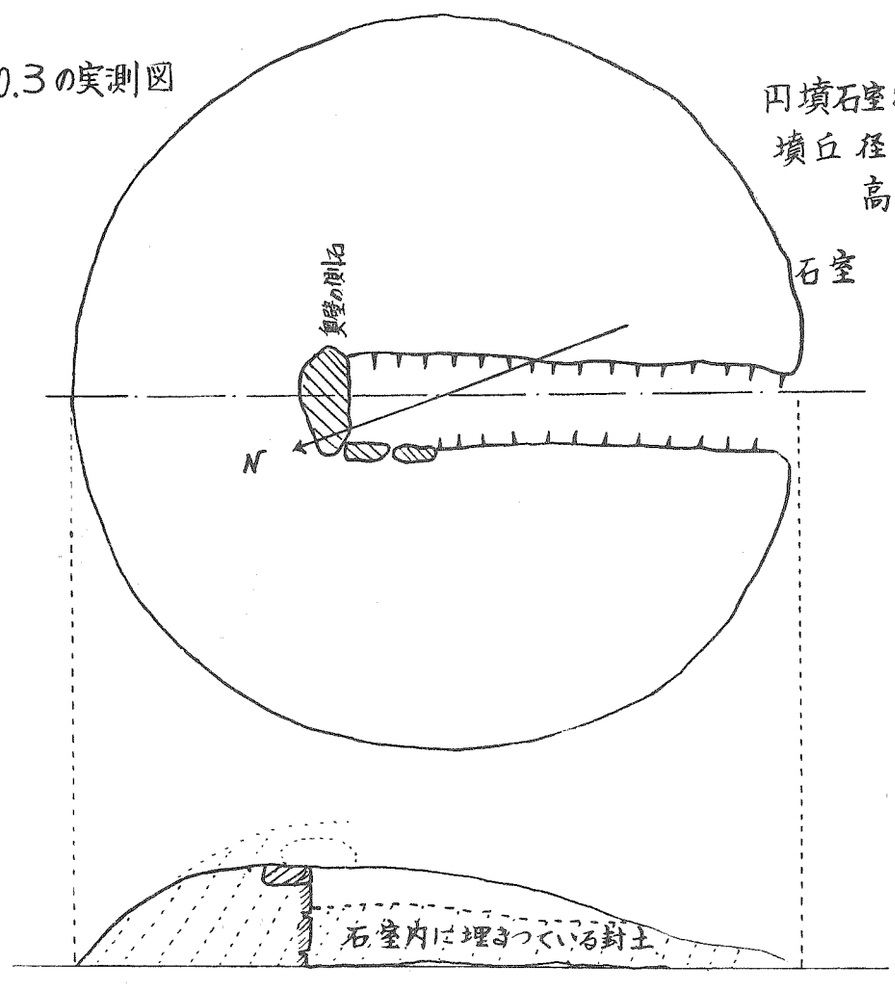
NO.2の実測図



円墳石室を有す。

墳丘	径	東西	12.50m
	高		2.20m
石室	長		5.50m
	巾		1.65m

NO.3の実測図

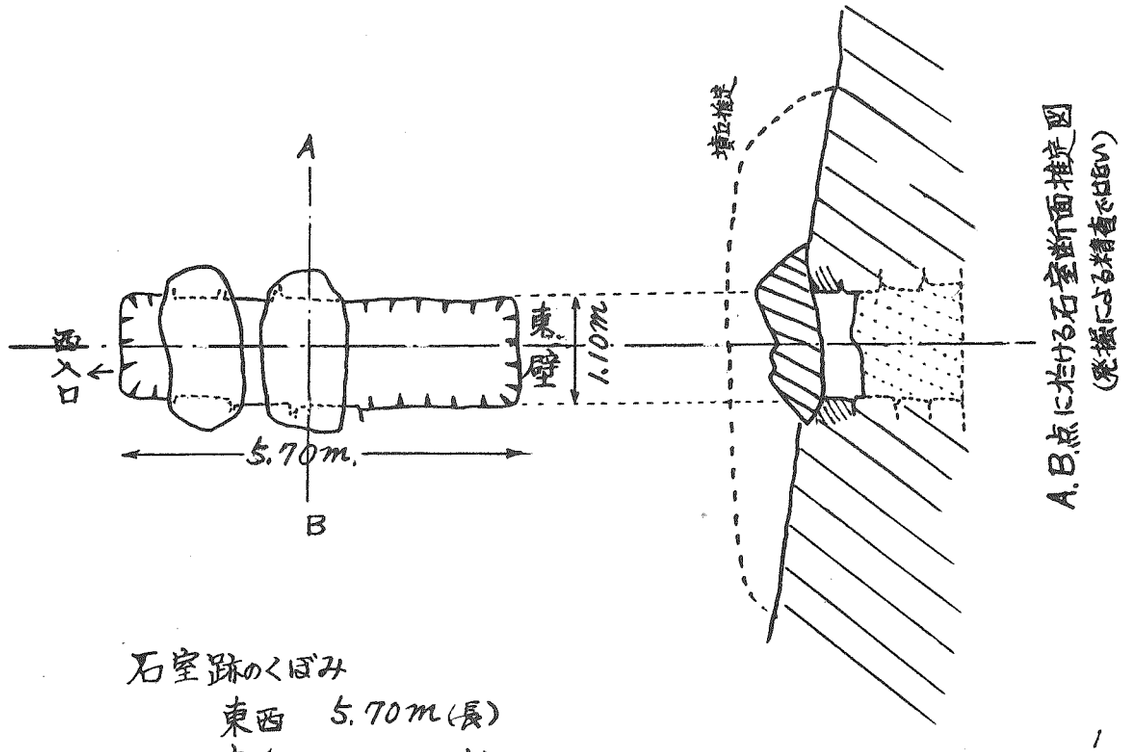


円墳石室を有す

墳丘	径	12.00m
	高	1.55m
石室		4.90m長
		1.10m巾

1/100

NO.4の実測図



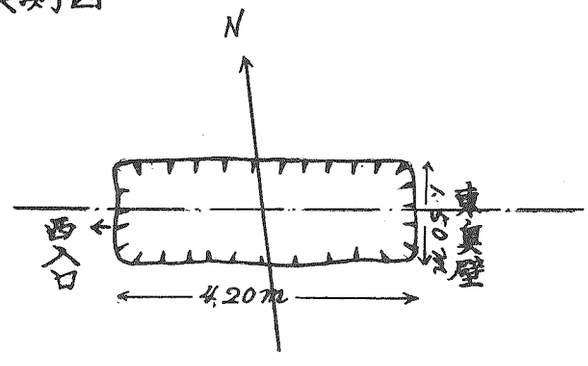
石室跡のくぼみ

東西　5.70m(長)

南北　1.10m(巾)

$\frac{1}{100}$

NO.5の実測図



石室跡のくぼみ

東西　4.00m(長)

南北　1.50m(巾)

深さ約80cm 測石蓋石なく、くぼみがあるだけであるが、NO.4と並んで同様の地形に存在するので同型墳であると解釈した。荒廃がNO.4より著るしいため、破壊後、埋まった部分が大きいものと考えている。

$\frac{1}{100}$